

## 1.

街並みが白く染め上げられ、歩く人々が厚手のコートやフード付きの上着に衣替えしてから一月ほどが経とうとしていた。

まだ数日先の話だというのに、あちこちの街頭に掲げられた聖夜の看板が僕にはありがたくない。何しろ今現在これといった予定はなく、今後入るような気配も微塵もない。

彼女の一人もいれば違ったのだろうが、携帯の電話帳に入っている女性なんて家族や親戚の名前ばかり。職場も所持持ちの同性ばかりなうえ、仕事が終われば寄り道もせず家に帰っては倒れこむように布団で眠りにつく生活。出会いを求めて出歩く時間も体力も残ってはいない。

冷え込んだ空気を避けるために突っ込んでいたポケットの中で触れる、今となっては時代遅れも甚だしい折りたたみ式の携帯電話を取り出してみる。

開く親指にわずかな期待をのせてはみたものの、電気の通った液晶画面に表示されたのは、飾り気のない初期設定の待受け画面と「新着なし」の文字だけだった。

思ったとおりではあったが、落ち込む回数にも度合いにも際限はない。肩を落とすほどの深いため息が口をついて出て行った。

この携帯とも何年一緒にやってきただろうか。

僕が中学生高校生の頃は、紛うことなき第一次携帯電話群雄割拠の時代だった。

大手三社から続々と発売される新機種に一喜一憂し、友人と一緒にカタログや特集雑誌を眺めながら、次はどの機種を買おうかなどという話題に花を咲かせていた。

この会社は良い音源を使っている、いやこっちはカメラの画素数が優れている、やっぱりあの会社の機種は微妙、などと休み時間に盛り上がっていたものだ。

一年、場合によっては半年程度の間隔で過去を凌駕するスペックの機種が出てくる時代。

少ない小遣いでは機種変更の資金を捻出することができず、当時は携帯新機種発売に備えてアルバイトをしていたようなものだ。

料金形態に疎い持ち始めの頃、通話料と通信料金合わせて数万円などというのは、僕も周りも当たり前だった。

今思えば高い授業料である。今の感覚で数年前の自分を思い返し、自嘲気味の苦笑いが浮かんだ。

刺すような冷気で赤くかじかんだ右手に握られた携帯電話。高校三年の夏、発売された当日に飛びつくように購入したもので、世間一般での評価もかなり高かった当時の最新機種。

あれほど新機種や情報に飛びついていたのに、夏を過ぎた頃にはいやおうなしに受験・就職の波に巻き込まれ、

緊張のあまり何一つ内容を覚えていない面接を経て、気づいた頃には今の職場で仕事をしていた。

幸い同僚や上司に恵まれた素晴らしい職場だ。……もう少し給料が高ければ。

いや、今の時代、人か金のどちらかに恵まれていてだけで十分だろう。野暮な思考を無理やり寒空に放り出す。

兎に角、今の自分にはあの頃のように、携帯電話を調べる余裕も変える理由もないまま数年が過ぎていた。職場において携帯電話に求められるものは、通話とメールが不足なくできれば良いという機能性であり、最新だとか画素数がどうかというスペックは必要ないもの。

就職活動の次は仕事を覚えなければならず、新しい機種や性能をチェックしている余裕がないまま時間は過ぎ去り、同時に自分の観念も変わっていた。

動いていれば十分だ、と。

## 2.

しかしこの携帯電話もそろそろ寿命が近づいているのを感じていた。

視認に不便はないものの、液晶画面は猫が乱雑に引っ掻いたように、縦横斜め小ささまざまな傷がついている。

すでに指に染み付いているため不便はないが、ほとんどのボタンは印字がかすれており、よく使う箇所に至っては塗装が完全に剥がれてわずかに変色したプラスチックが露出している。

スピーカーに不備があるのか内部的の接触不良か、はたまた送られるはずの信号が発されていないのか、朝目覚まし代わりに設定しているはずのアラームが鳴らないのがここ数日、僕を悩ませていた。

目覚ましがなくても何とか目は覚めるものの、覚醒するのと布団から出るのは違ったベクトルの労力を使う。いわゆる二度寝の誘惑が僕をかどわかそうとするのだ。

再び眠りに落ちるのを防ぐには、外部的な要因で無理やり布団から出るように仕向けなければならぬ。そこでアラームだ。自らの手が届かない位置で鳴る喧しい音を止める為には、どうあっても布団から出る必要がある。

一度布団から出てしまえば二度寝の心配はなく、同時にわずかではあるが歩行運動をすることで肉体も覚醒に傾く。

遅刻を防ぐ一石二鳥の手段なのだが、アラームが壊れてからは始業時間ギリギリに職場に駆け込むという、精神的にも心証的にもよろしくない日が続いていた。

「この携帯とも別れ時かな。手を切る時期か……」「手を切る」……クククク……」

普段とは違う笑い声が漏れる。僕自身はふと浮かんだ漫画のワンシーンを真似してみたただけなのだが、丁度近くを歩いていた女子大生位の女性二人が、怪訝な視線で僕を見ながら声を潜めて何かを囁き合っていた。

知らない人間から見れば以下の二つ、古臭い携帯電話の画面を見つめて妙な笑い声を出している変質者か、いきなり「手を切る」などと言い出した頭のおかしい変質者のどちらかに見えたのは間違いないだろう。

一気に現実を引き戻され、冷気にさらされていたのとは違う赤みが頬に差した。意味もなく咳払いをひとつして携帯を折りたたみ、何事もなかったかのように歩き出す。一刻も早くこの場から逃げ出したかった。

幸いなことに、目の前に広がる歩道は直進か左折という二つの選択肢を僕に用意してくれている。建物の

陰に身を隠せる左へと足が動いた。

僕の左折と同時に、道路を走り抜けていく車が揺らしたのぼり旗。その模様が強烈に目に留まる。

「信じられねえぜ：こういうのを奇跡っていうんだな、めったにある事じゃねえ：こんな街角を曲がった先に、偶然携帯電話キャリアの支店があるなんて：」

機種変更を考えている僕の前にあらわれたのは、かれこれ十年近く使い続けている携帯電話キャリアの支店だった。

会社名だけが無骨に描かれた看板の上辺には、可愛げのない無表情が特徴的な、キノコを模したキャラクターが鎮座していた。

ちょうどスーパーマーケットの青果コーナーでキノコの歌が流れていた頃だろうか。まるでパク：：：大きな流れにあやかる様に、このマスケットキャラクターが誕生したのは。

不意の再開に懐かしい気持ちがかみ上げてくるのを抑えられない。まだこのキャラクターが続投していた事実が、胸の奥に眠っていたあの頃の情熱の残りカスを再び燃え上がらせた。

街に吹く冷たい風は本来の目的を見失い、猛る熱源に注がれる酸素の如く、心の火をさらに激しく焚きつける。決心は一瞬の事だった。

### 3.

機種変更をする。

ただそれだけのことなのに、喉は焼けるように熱く乾き、心臓は太鼓のように絶え間なく拍動している。口は真一文字に結ばれて目は見開き、荒い鼻息が耳障りな排気音をたてる。その姿はさながら興奮状態のゴリラのように見えたことだろう。

緊張極まった硬い表情で店内へ続く二重扉をくぐる。扉に設置されたベルが小気味よく揺れて鳴り響き、顧客の来店を店内に告げる。

泥落としのマットに足が触れた瞬間に鳴り響く、あの頃を変わらない入店音。まるで十年ぶりの帰省だ。だがしかし、店内が赤と白を基調とした聖夜向け営業のおもむきを見せているのが少々癪に障る。ここでも、彼女の居ない僕をあざ笑うのか。

せっかくの興奮が一気に引いていくのを感じた。しかし携帯電話の調子が芳しくないのは事実だ、機種変更だけはしていかなければ。

トナカイと白ひげ爺さん、そして世の中のカップル達が煮えたぎる地獄の釜の中に消えていく光景を想像することで、湧き上がる怒りと苛立ちを抑え込む。

「いらっしやいませ」

柔らかで温かみのある声が投げかけられる。落ち着いた雰囲気纏うその声に、一度収まりかけた僕の緊張は再び頂点に返り咲いた。

入店の際に自然と俯いていた顔を、潤滑油の切れた歯車のようなぎこちなさでゆっくりとあげると、声から感じるイメージ通りの穏やかな笑みをたたえた店員の女性が佇んでいた。

変質者的な表情を顔面に貼り付けた僕を見ても、微笑みを欠片も崩さぬまましつかりとこちらを見据えて

いた。

女性と会話をするのは何年ぶりだろうか。女の気配もない職場だけに、事務的な会話すらすることがないまま年月は過ぎていた。

星の飾りやツリーの装飾がなされた店内に客は僕一人で、その応対をするために馳せ参じたこの女性店員という状況。僕に逃げ場はない。

否。思えば今までの人生の中で、僕に逃げ場などなかったのかもしれない。

数十年も整備されていない錆び錆びの機械人形のように緩慢でぎこちない足取りでカウンターまで歩き、勧められるままに椅子に腰掛ける。

座った瞬間、自分がどう歩いたかはもう忘却の彼方だった。右手右足を同時に振り出していたのではないか、そんな後ろ向きな思考が逡巡すると気が気ではなかった。

「あ、あの！機種変更したいんですけど！」

女性店員が口を開くためにわずかに前にのめった瞬間、反射的に口が開く。

買い物に行った際に店員に主導権を握られるのが嫌いな僕は、例えば服屋で店員が近づいてきたときには自分から言葉を切り出すようにしていた。

そうすれば話かけようとしていた店員は面を喰らってリズムを崩して自分のペースにもっていけることを、過去の経験則から知っていたから。

過去というのは人間に反省と進歩を与える。その成果の一つだった。

会話を切り出しかけたところを遮られた形になる彼女は一瞬驚いたように目をぱちくりさせていたが、一

瞬で表情を戻してきた。この辺りがプロたる所以なのだろう。

感心すると同時に、この優しい笑顔が作り物の営業スマイルであることを実感した。僕だけでなく、誰にでも向ける愛想笑いの一つなのだ。

「機種変更ですね。変更なさる機種は、お決めになられていますか？」

店側にとって至極当然の質問が返ってくる。どうやら僕は主語が抜けていたようだ。

最近の機種などほとんど知らないが、朝晩自宅で飯を食べる際に流していたニュースでしつこいほどに報道されていた、世界的に有名な新型携帯電話の名前だけは強烈に頭に焼きついていた。

とりあえずそれでいいだろう。有名なものを使っておけば間違いはないはずだ。

かつて携帯電話の知識を漁っていたとは思えないほどにそっけない選択理由に、知らぬ間に変わっていた自分に、ほんの少しのセンチメンタルを覚える。

昨今は叩いたりなぞったりするだけで操作できる、という程度の知識しかないが、使っていくうちに覚えていくだろう。そして、染み込んだ頃にまた時代は変わっていく。

そう、鬚がざんぎり頭になったように、時代は変わり、過ぎた時間は過去になっていくのだ。

この機種変更も、きつと数年後には思い出しては笑ってしまうような、過去の日になるのだろう。

ポケットに眠る携帯電話との別れを決定付ける一言を、数ある最近機種の中で唯一知っているその名を、ほんの少しの寂しさとともに目の前の女性店員に告げた。

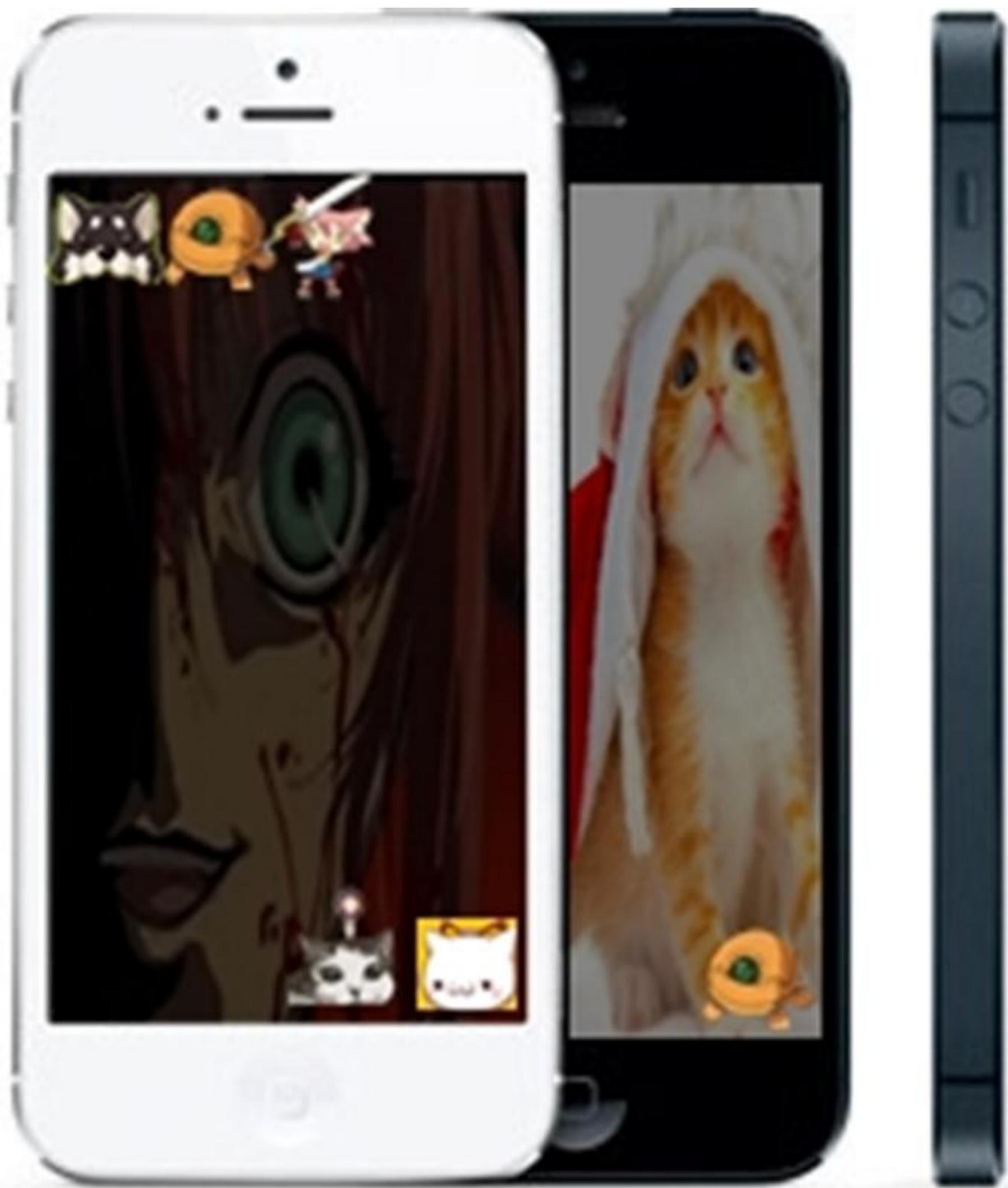
「iPhone5へだよ」

「お客様、当店はdocomoショップです」

4.

「ということがあつてな……」

「おじいちゃんってばうっかりさんだねー」



あとがき

思いつきを推敲せず書き続けたらテーマが迷子になった気がするので、「これテーマ関係なくね？」と思っただらはいじいてくだちい(っ、ω、ε)

ヘンガー